【 協働実践助成】

仙台市高齢者の持続可能な学び機会創出を目指す教育研究事業

井村　修(1　　伊藤　広之(1
瀧　靖之(2　　オガワ　淑水(2

(1 学校法人菅原学園
(2 国立大学法人東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター

1　事業実施団体について（1/2）

団体１：学校法人菅原学園

学校法人菅原学園は、1949年に設立した仙台市を中心に活動する法人グループです。

豊富な設備のもと、職業実践的なカリキュラムの提供を教育理念に掲げています。

最高の教育環境と情熱にあふれた教員の教育力を提供しています。



1　事業実施団体について（2/2）

団体２：国立大学法人東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター

スマート･エイジング学際重点研究センターは2017年に設立された学内共同教育研究施設です。

認知症予防を目的として、基礎生命科学から人文･社会科学まで、さまざまな学問分野が学際的に研究を進めています。

研究成果の社会実装を目指し、国内外の産学官、地域社会と連携した様々な活動も行っています。

高度なイメージング設備と大規模な脳データベースを有する世界有数の研究機関





地域共生社会をテーマにした高齢者と医学生のワークショップ



2　令和７年度事業の実施内容

（１）課題（１／２）

■ 全国的に一人暮らしの高齢者が増え、超高齢社会化

- 高齢化に伴う社会交流の低下は、さらなる認知機能の低下に繋がる
- 各省庁（厚生労働、教育、経済）のリカレント教育への機運の高まり

■ 仙台市の高齢化も喫緊の課題[1]

- 高齢化率は年々上昇
- 一人暮らし世帯が増加



[1] ›高齢者人口調査結果（令和5年） - 宮城県公式ウェブサイト、https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/chouju/05koureisyazinkou.html　に基づき作成

高齢者と地域社会が早期につながり、
持続可能な支援を行うための枠組みが早急に求められる

（１）課題（２/２）

■ 地域社会と高齢者の繋がりをつくる「シニア講座」を実施

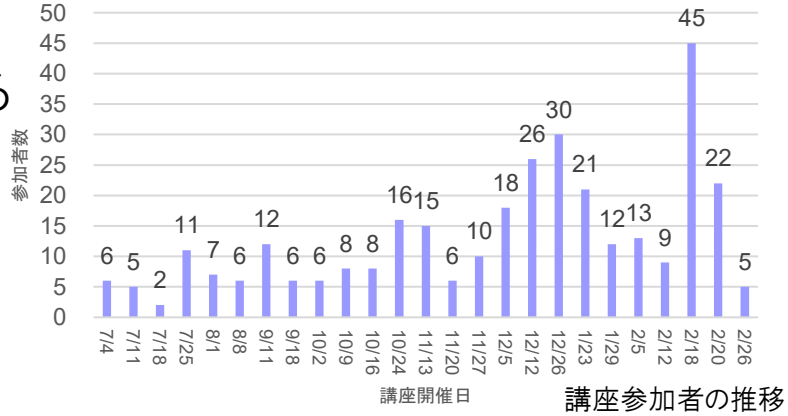
- ■ 当初は参加者が集まらず苦戦
- ■ 広報活動の継続より参加者数も順調に推移



シニア講座の様子
（フラワー講座）

■ 「持続可能な講座運営」の問題

- ■ 安定した参加者の確保が難しく、
  事業として講座を運営することの課題は残る



講座参加者の推移

■ 高齢者と地域社会が繋がる機会を さらに育む必要がある

- ■ 高齢者のニーズにあった講座を実施するには、企画段階からの参画や交流会を通じた高齢者の意見を反映出来る仕組みの構築が必要
- ■ 両団体が培ってきた経験を活かし、
  地域全体で持続可能な社会づくりを推進出来る体制の構築

2　令和７年度事業の実施内容

（２）事業の目的

【最終的に目指す姿】

高齢者が人生を豊かに過ごすことの出来る地域社会の実現

教育機関の立場より



【助成事業の実施により目指す姿】

高齢者の活動意欲の向上・交流の促進

- 興味関心を満たし活動意欲の向上　←　学び機会の創出
- オンラインも活用した高齢者の地域交流　←　場所と方法の用意

（３）令和７年度事業の目標と実績（１/４）

目標１：既存の講座内容の改良①（講座回数の増加）
実績１：講座回数については、目標３０回開催は未達だが、
全２５回の講座を実施し、延べ３２５名が参加するなど、
多くの高齢者に対して交流の場をつくることが出来たと考える。

目標２：既存の講座内容の改良②（世代間交流の促進）
実績２：フラワー講座において、高齢者のサポート役に専門学生を配置した結果、
講座アンケートでは、学生との会話も楽しめたとの回答が多数あり、
世代間交流の促進は達成できたと考える。

目標３：新たな講座の提供方法の検討・実施（講座の単位認定化）
実績３：講座の継続受講による単位認定については、
単発講座だからこそ受講しやすいとの高齢者の声を受けて
実施には至らなかった。

（３）令和７年度事業の目標と実績（２/４）

◆審査会意見と対応について

①東北大学がアドバイザー的な関与にとどまることなく、ともに協働する体制を構築したうえで取り組みを進めてください。

⇒**企画・運営・改善を共同で推進**

分析中心の分業体制から、東北大学が参加者の声を踏まえた講座設計・評価を担い、菅原学園が講師・学生・教室を活用して提供する協働体制へ刷新しました。

⇒**参加者の声を講座運営に反映**

東北大学の教員が講座に参加し、ヒアリング・アンケートで関心、不安、学び・交流への要望を把握。教員・講師間で共有し、座席配置、少人数交流、段階的な発表、学生の個別支援に反映しました。2月18日の瀧教授による共同講座には、過去最多の45名が参加しました。

⇒**学びを日常生活・地域交流へ展開**

先行研究で育成した「人間コーチ」と連携し、同世代への声かけや交流、学びの日常活用を支援。朗読活動の地域展開案も継続的に協議しました。デジタル講座ではLINEやQRコード付き年賀状を取り入れ、コーチによる連絡先交換や市のアプリの利用支援など、オンラインでの交流・情報共有にも広がりました。

⇒**関心の広がりと活動意欲を確認**

東北大学の分析では、後期に関心のある講座の選択数が増える傾向や、学びの深化、作品交流、継続開催への希望を確認。参加者の声を共同で講座づくりに反映し、興味・関心に応える学びの機会と、学習継続・地域活動への意欲を支えました。

（３）令和７年度事業の目標と実績（３/４）

◆審査会意見と対応について

②「習い事」と「学び」との住み分けを意識し、参加者が学びを深めていくことができる講義を展開してください。

⇒講座内で理解を深め、互いに学び合う技能の習得に加え、学んだ内容や自分なりの工夫を、自分の言葉で説明する機会を設けました。発表会ではルーブリックの考え方を意識し、完成度だけでなく、理解、工夫、共有を重視。作品紹介や感想交換、段階的な発表を通じて学びを深めました。東北大学が参加者の関心や要望を講師と共有し、講座内容や指導方法の改善につなげました。

③参加者が学んだことを地域に持ち帰り、地域内で学びの循環が生まれるような仕組みづくりに取り組んでください。

⇒講座での学びを地域で実践し、周囲へ広げる人間コーチや参加者が、学んだ知識・技能を家庭や地域で活用し、周囲に伝える取り組みを支えました。LINEや市のアプリの使い方を友人・家族に教える活動や、作品を介した交流など、参加者から周囲へ学びが広がりました。東北大学が人間コーチと継続的に打合せを行い、地域での朗読活動の企画、展開を支援しました。

（３）令和７年度事業の目標と実績（４/４）

◆　参加への安心感から人とのつながりへ　心理的変化から見た講座の成果

参加者の声に見られた心理的変化初期の「安心して参加できた」「自分にもできた」という実感から、「もっと学びたい」「自分に合った内容を選びたい」という意欲へと広がった。後期には、学生や他の参加者との交流を楽しむ声や、学びを日常生活に生かしたいという声が見られた。

・社会的ウェルビーイングの向上： 作品完成による達成感や、他者と作品を共有し認められる経験が、喜びや自信につながった。「幸福感が高まった」「生活を見直すきっかけになった」との声から、講座体験が生活の充実につながることが示唆された。

・継続的な社会参加の後押し： 安心感と「できた」という実感を土台に、自ら学びを選び、さらに取り組みたいという意欲が見られた。後期には関心のある講座の選択数が増える傾向があり、継続・定期開催への期待につながっていた。

・地域の活性化・社会的孤立の軽減： 学生の丁寧な支援や作品づくり・共有を通じて、無理なく会話が生まれ、顔なじみや交流を楽しむ声が増えた。講座が人とのつながりを育む場となったことが示唆された。地域全体への効果や孤立の軽減は、今後の継続的な評価が必要である。（※心理的変化は各期の回答傾向を整理したものであり、同一参加者の変化を追跡した結果ではない。）

（4）事業の実施体制

団体1：
学校法人菅原学園

役割：
◇事務局業務
◇講座の企画・広報・運営

- 菅原一博
  - 理事長
  - 事業統括
- 井村修
  - デジタルアーツ仙台 副校長
  - 事業運営
- 伊藤広之
  - 法人本部 総務部長
  - 事業運営

団体2：
国立大学法人東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター

役割：
◇講座アンケート分析
◇講座内容の分析・改良

- 瀧靖之
  - 教授
  - 事業統括
- オガワ淑水
  - 助教
  - 事業運営

（５）事業スケジュールについて

事業スケジュール

4月	オリエンテーション、前期講座
5月	前期講座
6月	前期講座
7月	前期講座
8月	夏休み、データ分析
9月	前期講座
10月	オリエンテーション、後期講座、中間報告
11月	後期講座
12月	後期講座
1月	後期講座
2月	後期講座
3月	春休み、データ分析、事業報告

（６）使用経費について

使用経費

事業費総額	190万円
収入内訳	
仙台市助成金	125万円
事業収入	65万円
支出内訳	
・人件費	53万円
・報償費	12万円
・消耗品費	61万円
・印刷製本費	57万円
・通信運搬費	7万円

3　実施した取り組みの紹介

令和７年度事業の実施状況について

●講座実施と募集

■ 講座実施

□ 右図の日程で予定通り実施完了

□ 講座内容と講師

- ■ 高齢者からの要望が多かったフラワーを中心に音読･デッサン･スマホ操作など幅広いテーマの講座を開講
- ■ 学校法人菅原学園の教職員･専任講師などのプロ人材が講師を務める

□ 参加費

1, 000円

※ 別途、花代など講座ごとで追加料金がかかる場合もある

□ 実施場所

学校法人菅原学園の専門学校デジタルアーツ仙台の施設を活用し実施



3　実施した取り組みの紹介

令和７年度事業の実施状況について

●講座実施と募集

■ 講座実施の様子

①



【 写真① 】
フラワー講座において、受講者がアレンジメントを作成している様子。
専門学校生からサポートを受けるなど、世代間交流も行われている。

②



【 写真② 】
音読講座において、専門学校の録音ブースを使用して声の録音を行っている様子。

③



【 写真③ 】
脳トレ講座において、専門学校のゲーム学科の機材を使用してゲーム体験を行っている様子。

4　事業の成果と今後の展開

事業の成果と今後の展開について（1/2）

■東北大学による参加者インタビュー・アンケート分析報告書の作成

・講座参加者を対象に実施したアンケート結果について、前期前半、前期後半、後期前半、後期後半の各期ごとに定期的に整理、分析を行い、講座に対する評価の変化や参加者の意識やニーズの推移を明らかにすることで、講座運営および内容改善に向けた示唆を得ることを目的とした。

■分析結果に基づく講座改善の例

・本講座の参加者が講座を
「一時的な受講の場」ではなく、
「関係性が育まれる場」として
捉え始めているとの分析
⇒交流がしやすいテーブル配置や
　発表時間の確保など内容改善
⇒参加者の満足度の向上に寄与

期	SDT要素	環境因子	課題・背景（分析より）	推薦事項（具体的に何をどうするか）
前期前半	有能感	情報環境	初参加者が多く、不安・難しさを感じやすい	・講座冒頭に「今日のゴール」をスライドと口頭で明示・専門用語は必ず言い換え＋実生活の例で説明
		物理環境	初回参加時の緊張感	・座席は固定せず、見やすく落ち着いた配置にする
	自律性	制度・ 運営環境	内容や料金が事前に分かりにくい	・事前案内に「対象者」「準備物」「できなくてもOK」を明記
	関係性	社会環境	交流への心理的ハードル	・学生サポーターは技術補助に徹し、交流を強制しない
前期後半	有能感	学習環境	難易度評価が分岐	・「基本編」「＋α」を明示し、どちらも正解であると説明
	自律性	選択環境	関心・レベルの違いが顕在化	・「聞くだけ」「試す」など参加方法の選択肢を提示
	関係性	対人環境	交流は副次的段階	・短時間・任意のペア共有を限定的に導入
後期前半	有能感	成果可視化環境	作品完成による達成感	・完成後に講師が「良かった点」を全体にフィードバック
	関係性	社会的環境	交流志向が高まる	・名札（下の名前・ニックネーム可）を導入・テーブル単位で30秒の作品紹介
	自律性	共有環境	他者の工夫への関心	・鑑賞・共有の時間を必ず確保（発言は任意）
後期後半	有能感	意味づけ 環境	学びが生活・人生に接続	・講座終盤に「生活でどう使えそうか」振り返り時間を設定
	自律性	参加型運営環境	参加者から提案が増加	・要望を次回講座に反映し「反映しました」と掲示
	関係性	心理的安全環境	認知・喪失など人生課題への関心	・Q&A・フリートークを事前に組み込む（話さなくてもOK）
全期間共通	3要素横断	環境全体	継続参加・満足度は高い	・講座を「教える場」ではなく「一緒につくる場」と明言・本報告を living document として更新

東北大学報告書一部抜粋

4　事業の成果と今後の展開

事業の成果と今後の展開について（２/２）

■２団体の協働による成果

・菅原学園の教育資源と東北大学の設計・評価、国内外のネットワークを活かし、参加者の声を講座改善につなげました。菅原学園では運営が自走しています。
・国際共同研究計画「FORTED」の応募に向け、欧州等と10回以上協議。既存授業に対話・協働などの市民教育を組み込み、学びを強化する計画をまとめています。

■課題を踏まえた今後の展開

・地域貢献を前面に出すと負担感が生じるため、本人の興味や身近な交流から地域への関わりを支えます。
・既存授業の学びを強化し、参加者が地域づくりを自分事として捉え、協力して行動できる力と、それを活かせる環境を育みます。